

西田幾多郎 未公開ノート類 研究資料化

報告 **1**

2017

道徳的判斷

意志の價值的判斷は二種あると思ふ。

一は我々の常識に存する考であつてカントが取つて
以て自家の倫理學說と紐續する善、惡とし左もの。

二は我々の行爲の善惡は其動機から判斷せらる。それで
考は其の性質を具へてその權は存すぬ。

1. conscious

2. voluntary,

3. personal.

人格的であるといふ。此種の動機の中は自分の
選擇し決定するものと他とを兼ねて居る。即ち

plurality of simultaneous possibilities と free will

といふことを徹底して居る。

西田幾多郎
未公開ノート類
研究資料化

報告 **1**

2017

i はじめに
浅見 洋 (石川県西田幾多郎記念哲学館館長 / 石川県立看護大学特任教授)

2 写真 一資料・修復・翻刻一

21 第一部 修復と翻刻の経過

23 修復方針の決定までの措置
山名田 沙智子 (石川県西田幾多郎記念哲学館専門員)

28 修復事業の経過
山名田 沙智子 (石川県西田幾多郎記念哲学館専門員)

34 翻刻作業について
中嶋 優太 (石川県西田幾多郎記念哲学館研究員)

49 報告資料

59 第二部 寄稿

61 西田資料修復報告
板倉 正子 (NPO 法人 書物の歴史と保存修復に関する研究会代表理事)

64 西田講義ノートと金沢大学
森 雅秀 (金沢大学大学院人間科学系教授)

66 翻刻に携わって
齊藤 嘉生 (金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程)

68 京大文学研究科における西田新史料翻刻分析について
林 晋 (京都大学大学院文学研究科教授)

70 翻刻作業に参加して
満原 健 (奈良県立大学非常勤講師)

72 西田、忘れられた著者たちとの対決 — 「宗教学講義ノート」翻刻より
吉野 斉志 (京都大学文学部非常勤講師)

74 西田幾多郎とレクラム文庫 — 翻刻作業に参加して
高橋 麻帆 (石川県立看護大学非常勤講師 / 古書肆「高橋麻帆書店」代表)

77 第三部 翻刻

79 「倫理学講義ノート第一分冊」(B05)について
中嶋 優太 (石川県西田幾多郎記念哲学館研究員)

81 「倫理学講義ノート第一分冊」凡例

82 翻刻本文 「倫理学講義ノート第一分冊」

116 人名表

117 訳語表

125 翻刻サンプル 「宗教学講義ノート第一分冊」

126 「宗教学講義ノート第一分冊」(E04)について
中嶋 優太 (石川県西田幾多郎記念哲学館研究員)

128 あとがき
浅見 洋 (石川県西田幾多郎記念哲学館館長 / 石川県立看護大学特任教授)

129 執筆者一覧

西田幾多郎未公開ノート類と その修復・翻刻・研究資料化について

浅 見 洋

(石川県西田幾多郎記念哲学館館長/石川県立看護大学特任教授)

1. 西田幾多郎未公開「ノート類」について

2015年10月に西田幾多郎の遺族から石川県西田幾多郎記念哲学館に寄せられた自筆原稿、遺品等の中に、西田直筆ノート50冊、大量の考察メモ、レポート類など(以下:ノート類と記述)が含まれていた。本ノート類の大半は2009年に完結した新版『西田幾多郎全集』(岩波書店)編集の際に用いた資料群には含まれていない講義ノート、研究ノート、読書ノート、メモ等と推測することができ、西田幾多郎記念哲学館にとっては、第一級の保存資料である。また、西田の直弟子たちを編集者として、1965~66年に刊行された増補改訂第二版『西田幾多郎全集(全19巻)』(岩波書店)以降、この半世紀に見出された西田幾多郎に関する最大の資料であり、おそらく最後のまとまった資料である。それ故、本ノート類の公開、研究資料化は西田哲学の形成に関する研究に深まりと新たな解釈をもたらす可能性がある。加えて、西田哲学が日本の哲学研究において一つの基軸であり続けてきたことを勘案すると、日本哲学史、比較思想研究などにも一石を投じる潜在性を秘めている。

これまで、生前中には発表されなかった西田の手書き草稿、直筆ノート、日記、書簡類の翻刻、研究資料化は主に全集刊行作業の一環としてなされてきた。1978~80年に刊行された増補改訂第三版『西田幾多郎全集(全19巻)』(岩波書店)では、特に草稿、ノートが第十五巻「講義」に「哲学概論」「宗教学」、第十六巻「初期草稿」に「英国倫理学史」「心理学講義」「倫理学草案」「純粹経験に関する断章」として収録されている。さらに、編集者を一新し全面的に改訂が施されて、2002~09年に刊行された新版『西田幾多郎全集(全24巻)』(岩波書店)では、第十四巻「講義記録」、第十五巻「講義ノート」、第十六巻「断章、研究ノート」に旧版収録のものに加えて、旧版発行後に発見された新たな草稿、ノートなどが追加された。第十四巻の「凡例」冒頭には収録に関する基本方針が次のように記されている。《著者が大学などで行った講義の聴講者による筆記を「講義記録」、講義のために著者自身が準備したノートを「講義ノート」として第十四、十五巻に収め、それ以外のノートを内容に鑑みて、著者が独自の思索

を展開しているものに「断章」、主として著者以外の著作について筆記しているものに「研究ノート」という名称を付した上、これらを第十六巻に収めた。》第十四巻には講義記録（「宗教学」「哲学概論」「アリストテレスの形而上学」「プロチノスの哲学」）、講義ノートⅠ（「英国倫理学史」「心理学講義」「倫理学草案」）、第十五巻には講義ノートⅡ（「哲学概論」、「Vorlesung1926」〔講義 1926〕）、第十六巻には「断章」（「純粹経験に関する断章」）、「研究ノート」が収録されている。

本ノート類を「未公開資料」とする根拠は、資料の判読がほとんど進んでいないが故に推測の域を出ないが、現在のところ 50 冊のノートで新版全集に掲載されているもの、ないしはその底本になったと考えられるものが見出せないからである。勿論、いままで発見された西田資料（ノート、手帳、カード、メモ等）の中には新版全集に収録されなかったものも少なくない。収録されなかった資料は、基本的にはすでに旧版に収録されたものの底本、ないしは研究資料化にはなじまないもの、断片的なメモなどである。それらに比して、本ノート類には新版全集に収録されたノートとそんな色がない史料価値をもったノートが含まれている。

ただし、全てかどうかは断定できないが、旧版全集の編集者たちはこのノート類の存在を知っていたと推測できる。例えば、旧版増補改訂版全集第十五巻に収録されている講義記録「宗教学」は久松真一の受講ノートを底本にしている、この経緯について久松は次のように記している。

「先生自筆の講義原稿が保存されて居るがこれは洋罫紙 SP 判 3 帖綴ノート四冊であって、各冊の表紙には Religion と書いて、それぞれ 1、2、3、4 の番号が打ってある。概して各枚の表頁には講義の草案が、裏頁には関係資料が書かれて居る。各冊総頁百二十の中、表頁は殆んど全部書かれて居るが、裏頁は書かれておらぬ空白がかなり多い……、各冊に多少とも書かれて居る頁数を挙げて見ると、第一冊は六十五頁……。幸いにも先生のかような自筆原稿があるのであるから、これをこの講義番号の底本とするのが最も至当ではあるが、筆者の筆記した講義と照合して見ると、無論同一のところが多く、又それより詳しいところも部分的にはあるのであるが、素描に終わって居るところも多く、かつ欠けて居るところもかなりあるのであって、全体からいって講義の筆記程に詳しくもなく整頓もされて居ないので、これを底本とすることは困難であるから筆者の筆記の方を採ることにした。……幸いに先生の自筆本があるから、それを参照して校訂補足し、少なくとも先生の原意に違わぬようにと務めはした。」（旧版第三版『西田幾多郎全集』第十五巻「後記」489-490 頁）

上述引用の下線部の「Religion」は、私たちがすでに第一次翻刻を終えたノートである。とすれば、今回、哲学館に寄せられたノート類は旧版全集の編集者たちにはその

存在が知られており、二重下線のように、参照されているのである。しかし、新版編集資料群には存在しておらず、新版全集に掲載された、ないしは参照されたという形跡はない。なぜ、旧約全集編集時に確認できた資料が、新版編集資料群から失われたのかは定かでない。ただし、旧版でも底本として久松の講義記録ノートが使用され、西田の自筆ノートそのものが公開されなかったのであり、本ノート類は文字通り「未公開資料」と呼ぶに値する。

2. 修復作業の経緯

誰がどのような基準で整理したのかは不明であるが、本ノート類は「ノート十冊」「倫理ノート八冊」等のタイトルが付けられたもの、付されていないもの、計12ブロックに分けて保存されていた。本館では、それらのブロック各々をアルファベット大文字でA~Lと命名し、各ブロック内のノート類を便宜的にA1、A2・・・C6、C7・・・と資料番号を付して分類した。

2016年3月時点でノート類を外観から大雑把に分類すると、旧制第四高等学校・京都帝国大学時代等(1895-1928年)の講義ノート(11冊)、東京帝国大学選科在学中(1891-94年)のノート(10冊)、現時点では筆記時期が特定できない研究ノート(10冊程度)、読書ノート(15冊程度)、不明なもの(4冊)の他に、考察メモ、原稿類など(積み重ねた厚さ約30cmの5束、以下、レポート類と記す)であった。東京帝国大学選科在学中のノート(「村上講師 印度哲学」と表記されたノート有り)を除く40冊のノートは、A:講義ノート、B:研究ノート、C:読書ノートに分類することができる。(全集ではBを「断章」、Cを「研究ノート」と分類している。)講義ノートと類推されるノートの表紙には「倫理学」「Religion」と書いたものがある。表紙から Kuno Fischer; Logik und Metaphysik、Alfred von Church; Stories from Homer、Goethe; Hermann and Dorothea、Schiller; Die Jungfrau von Orleans、T. H. Green; Prolegomena to Ethics 第四卷 The Application of Moral Philosophy to the Guidance of Conduct、W. Wundt; Ethik 第三卷 Die Prinzipien der Sittlichkeit und Die Sittlichen Lebensgebiete の読書ノート、Hussel の Ideen、Logische Untersuchungen の読書ノートと推測されるものがある。また、T. H. Green、O. Pfleiderer、Th. Lipps の名が確認できる。

使用言語は日本語(ひらがな交じりのノート9冊、カタカナ交じりのノート19冊)、ドイツ語、英語、フランス語等で、引用文や専門用語として漢文、ギリシア語、ラテン語なども散見される。ノートの大半は洋罫紙 SP 判 3 帖綴ノートであり、背クロスに麻が使用されている。表紙にはフレンチ系、あるいはドイツ系と思われるマーブル模様があり、書物と同じ体裁になっているものや桜、四高のマークが入ったものがある。

ただし、館に寄せられた時点で、ノート類はかなり汚損、水損が進んでおり、固着したものがかなり多く、ノートの頁とメモ類一枚一枚を展開する(切り離す)必要があった。そのため、水損資料の乾燥、カビ、虫食いの洗浄、破損箇所修復、画像データ化のための写真撮影を行った。乾燥、洗浄、修復、撮影(以下、総称して修復作業と記す)の目的は①資料のさらなる劣化を防ぐこと(保存資料化)、②展示・教育・研究資料としてふさわしい状態をできるだけ回復すること(展示資料化、研究資料化)である。

具体的には、2015年度末から、日本でも最高度の乾燥処理技術と史料修復技術をもった国立奈良文化財研究所と関連の修復業者に依頼して修復の調査及び作業を行っていただいた。奈文研での真空凍結乾燥処理、修復業者のクリーニングの結果、17年末で50冊のノートの内、固着がひどい4冊のノート以外は展開、クリーニング、写真撮影、画像データ化を終えた。残り4冊も18年3月末までには展開予定である。資料そのものと修復作業過程を画像データファイル化することは、保存資料の劣化を防ぎ、将来のデータベース化、アーカイブ化に備えることができるという点で、博物館事業に対してIT技術がもたらした大きなメリットである。しかし、修復を終えた史料をそのまま画像データ化することによって、哲学の博物館の資料調査・研究という役割が完遂するわけではない。展示資料のためには資料保存の観点からは今後レプリカ作成が必要であり、教育・研究資料化のためには手書き文字の翻刻が課題となる。そうした博物館に課せられた責務と関連する作業は、石川県西田幾多郎記念哲学館の運営主体であるかほく市の予算で実施している。

3. 翻刻と研究資料化の方法と方針

修復の見通しがほぼ立ち、判読可能性が高いもののうち、社会教育・研究資料として価値の高い講義ノートから順次翻刻に取り組んでいる。汚損やインク流れ等による文字消失、不鮮明箇所があり、ノートであるから見え消し、書き込み、訂正、縦書き、略記、判読できない文字、誤記、脱字等が存在することに加えて、日本語(ひらがな、カタカナ、漢字)とアルファベット表記等が混在している。そうした修復されたノート類も含めて、館の所蔵資料をデータベース化、アーカイブ化することは現代の博物館に必須の情報化作業であり、本館としてはより汎用性をもった研究資料化、西田研究のプラットフォーム化を目指している。そのため、研究資料として価値が高いと考えられる文字情報は、解説、分析を加えながら活字による出版を目標としている。

翻刻の順序としては、最初にひらがな、カタカナ混じりノート(32冊)を、次いで欧語ノート、レポート類のうち、史料価値を有するものを優先的に翻刻する。また、具体的作業は基本的には一次翻刻、二次翻刻の2段階に分けて実施する。この2つの

段階は判然と区分することはできないが、基本的には一次翻刻では翻刻、編集方針に基づいて、ノート毎の文字おこし、誤記の明示などを行う。二次翻刻では判読不明箇所の判読、誤読箇所の修正、体裁の統一などと同時に、人名、著書名の確認、専門用語の解説、引用元との照合、省略箇所等の補足、欧文箇所の翻訳、引用文献・登場人物の解説など、出版を前提に翻刻の質を高める。一次翻刻は基本的に博物館事業としてかほく市予算で実施する。二次翻刻とそれと併行して実施する資料分析、解読は研究作業として科学研究費補助金・基盤 B 一般 (17H02264)「西田幾多郎のノート類の研究資料化と哲学形成過程の研究」(代表者：浅見洋)を活用して実施する。

一次翻刻は、これまで類似資料、文献のアーカイブ化や翻刻の経験が豊かである京都大学大学院文学研究科史料・情報学教授・林晋、金沢大学人間社会学域附属資源研究センター長・森雅秀(いずれも上記科研の分担研究者)を通して京都大学、金沢大学の両大学に業務委託し、両大学の OD、院生、学生等を雇用して実施している。担当区分の大まかな目安は、西田の京都帝国大学在職時代以降と推測されるノートは京都大学で、それ以前の第四高等学校在職時代などに書かれたと推測されるノートは金沢大学である。ノート類は日本語、ドイツ語、英語など複数言語による直筆資料であり、翻刻には西田の筆致と思考に慣れ、哲学用語、哲学史、外国語にある程度習熟した人材を複数雇用する。また、二次翻刻と資料分析、解読は西田哲学、日本哲学研究者である科研の分担研究者、連携研究者、研究協力者が中心となって実施する。加えて、ドイツ語、英語、漢文の直筆原稿翻刻に長けた専門家やノートで引用されている特定の哲学者、文学者等に関して造詣の深い研究者に知識提供をお願いするケースが出てくると想定している。

翻刻作業には、林晋を中心に開発された「人文学におけるテキスト研究用のオープンソースソフトウェア SMART-GS (SMART-Geschichte Studie)」を用いる。林はこれまで SMART-GS の開発や、「京都哲学アーカイブ (<http://www.kyoto-gakuha.info/>)」を構築するなど、資料情報化に非常に優れた実績を残している。SMART-GS のレクチャーの後、2017 年 2 月から試行として金沢大学で倫理学講義ノートの一部 (B05)、京都大学で宗教学講義の一部 (E04) の翻刻を開始し、17 年 3 月末には試行を終えた。結果として B05 には未判読文字 365 文字 (1.18%)、欠損文字 (字のかすれ、虫食い等で消えている文字) 808 文字 (2.62%)、E04 には未判読文字 97 文字が残った。次いで 18 年 5 月からそれらを対象に二次翻刻を開始した。

B05 は、記述内容から講義ノートであり、B06、07、08 にはそれぞれ、「第 6 章」、「第 8 章」、「第 9 章」という縦書きの章立てがあり、西田の倫理思想を記述した、一定のまとまりをもった文章だと解することができる。また、引用文献から京都大学での講義

ノートと推測できる。とすれば、新資料の倫理学講義ノートは『善の研究』の草稿となった第四高等学校時代の講義草稿「倫理学」からの哲学的、倫理的思索の展開を辿る研究資料となり得る。また、本ノートには当時の西洋の心理学、倫理学との対話を通して、西田が独自の道徳的判断や人格概念を形成していく思索の跡が垣間見え、日本哲学史、比較思想の資料としても貴重である。

E04は先述した旧版第14巻所収の久松のノートを底本とした「宗教学講義記録」との大きな相違点は、E04は欧語、特にドイツ語での表記が圧倒的に多いことである。久松は「後記」で「厳密に考えれば、種々な点で過誤や粗漏が無いでもなかろうと思う。西田先生の昭鑑しょうかんと大方の是正こんがんを惓願する」と記している。本ノートの翻刻作業と公表はそうした久松の懇願に応える作業であるだけでない。全集収録の講義記録は宗教学概論として組織的な構成を取っており、かつ当時の西洋の宗教学、宗教心理学に対する比較思想的検討が見いだされ、西田宗教哲学の体系的理解とその思想形成の考察にとって貴重な資料である。比して、今回翻刻に着手したのは久松というフィルターを通さない西田直筆のノートである。その翻刻は久松が書いているように全集収録の講義記録より貧弱であるかもしれないが、ノート裏面に書かれている参考文献など、全集にないものを含んでおり、西田哲学の理解をより豊にする可能性を秘めている。

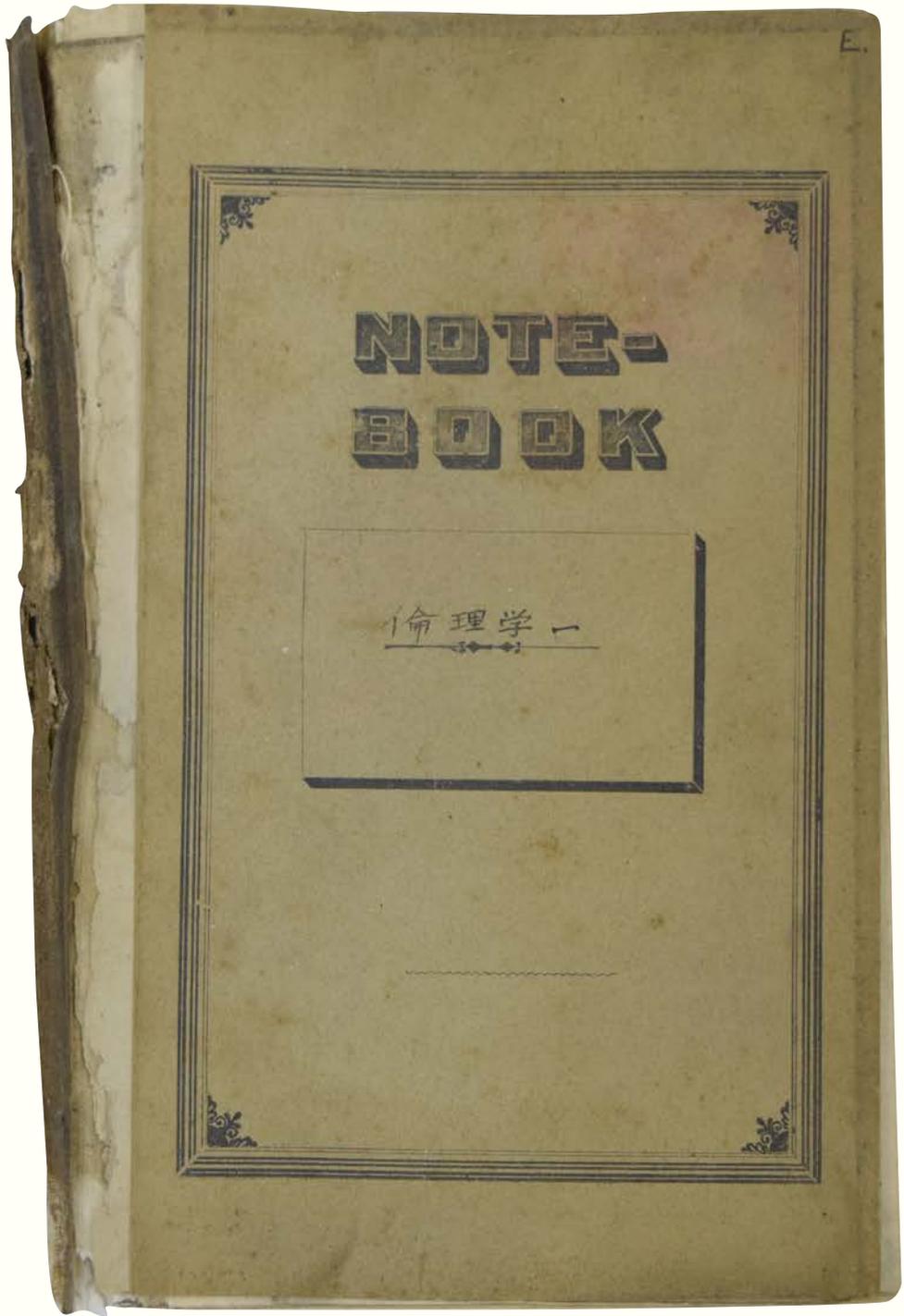
4. 本事業報告について

事業報告第一号では、「西田幾多郎未公開ノート類」の修復、翻刻、研究資料化作業の進捗状況と成果を報告すると同時に、作業の途上や結果に関する研究報告を行う。本事業の直接目的はノート類の翻刻、研究資料化と資料に関する研究にあるが、翻刻に先立つ資料修復、翻刻の経過についても詳細に記した。近・現代哲学、思想分野において、今回のような価値の高い、汚損、水損文献資料が発見されることは稀である。従って日本唯一の哲学の名を冠した博物館である本館にとっても、人文系研究者にとっても、本ノート類の修復、翻刻作業は今後の汚損、水損資料の博物館資料化、研究資料化の一つのモデルになり得る。そのため、この事業報告では修復、翻刻のこれまでの経緯と経過、最初の翻刻成果、修復、翻刻に関わっている人々の報告と感想を掲載した。ただし、今回掲載した翻刻はまだ不完全であり、今後さらに翻刻の質を高めていく必要がある。

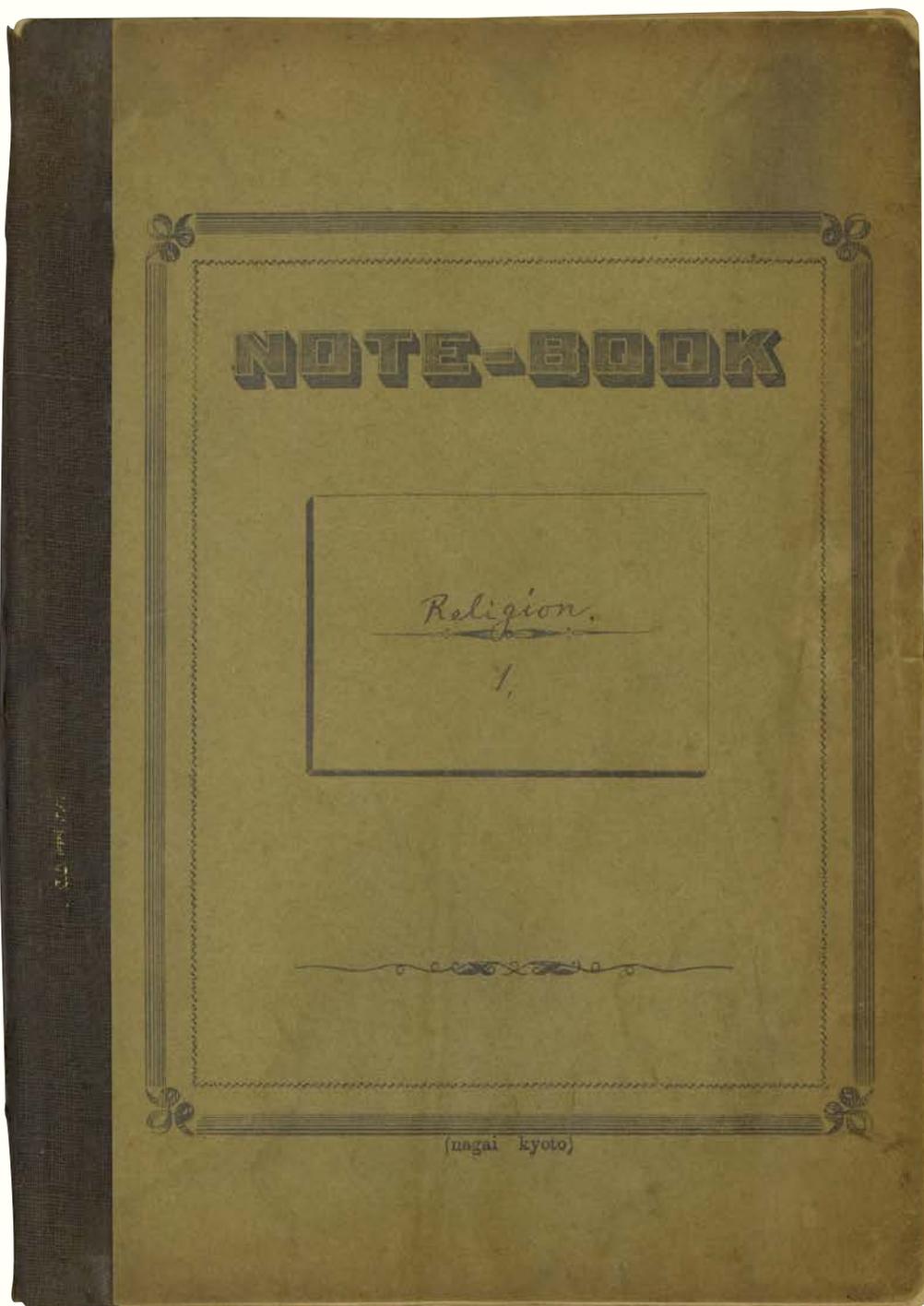
写真

資料・修復・翻刻





倫理学講義ノート第一分冊(B05)表紙



宗教学講義ノート第一分冊 (E04) 表紙

1/101 think of judgment &
for a while in the
nature of just & moral
good & evil
A. Hastings & others. 1848
Gud = good = ...

倫理学講義ノート第一分冊 (B05) 左頁

道德的判断

意志の價值的判断ニ二種あると思ふ。

一は我の常識に存する考であつてカトク取つて以て自家の倫理學說と組織する善惡としたもの。之を行ふは行爲の善惡は其動機から判断せらる。それでその行爲は次の性質を具にせらねばならぬ。

1. Conscious
2. Voluntary,
3. Personal.

人格的であるといふのは種々の動機の中から自らが選擇し決定した行爲といふことを含んで居る。即ち *plurality of simultaneous possibilities* と *free will* といふことを徹底して居る。

命令の性質は *Categorical imperative* である。

次は我々の普通には道德的判断としてせらぬが實際において我々の行爲を判断する有力なる標準となり且つ Bentham, Mill などの之を道德的判断とした所のもの

此處には行爲の價値はすべし結果によつて定まる。 *good motive* は *good result* を生ずるが故に要他ありとするのである。その行爲は *conscious*

2. Falsch Kultursphäre

religio = Gebundenheit

宗教学講義ノート第一分冊(E04)左頁

§. 1. Introduction.

宗教といふ中には Naturvölker の中に居る
 最下等なる Naturreligionen から Kulturvol-
 ker の間に居る深い高きなる宗教 (例い
 は基督教、仏教) に至るまでが含まれ
 居る。同一宗教を信する人々の間では
 その信仰の内容と比較して見たならば
 甚だ差異があるかも知れない (Christentum
 へも Mysticism の如きは仏教に似て居る)。
 今^の Religion と名づけられるものの内容を
 比較して見たならば 差異があるであ
 り。

併し、宗教と名づけられるものの内容を
 探るに拘らず宗教といふ一つの層の下に統
 括せしめる以上は何等かの共通の点 (Wort)
 がなければならぬ。いかんものか宗教の
 gemeinsame Merkmale である。

religion は最も廣く、神と人間との関係と
 見えて居る (Tiele 等)。
 Ich meine damit (Religion) die Äußerungen
 des menschl. Geistes in Worten, Handlungen, Ge-
 bräuchen, Institutionen, welche von dem Glau-
 (zu infernal!)

ノート表紙（展開・クリーニング作業後）一覧

2015年10月に当館へ、西田幾多郎直筆ノート50冊を含む膨大な資料が寄せられた。ノート以外にも、大量の考察メモ、レポート類が含まれるが、ここでは全50冊のノートの表紙の写真を掲載した。写真は基本的に、乾燥、展開、クリーニングの作業を経た後に撮影したものである。

ノート右下部の記号はノートの整理番号である。整理番号の先頭のアルファベットは資料が寄せられた際にそれぞれのノートが属していたブロックに付したものである。マープル模様、NOTEBOOKの印字、挿絵、タイトル記入欄の意匠など、それぞれタイプの異なったノートが使用されていることが分かる。また、手書きでReligion〔宗教学〕といった講義タイトルや、他の思想家の著書や論文のタイトルが書かれたものもある。



A01



A02



A03



A04



A05



A06



A07



A08



A09



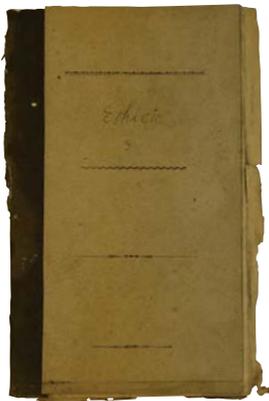
A10



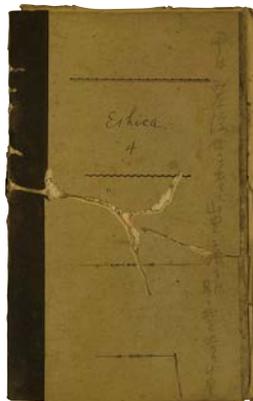
B01



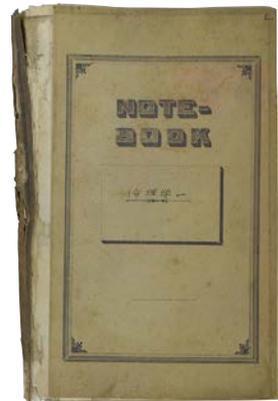
B02



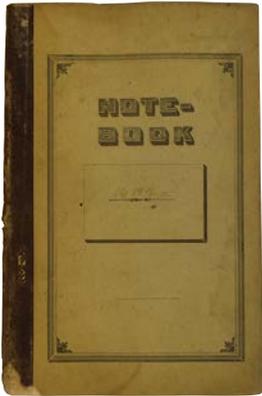
B03



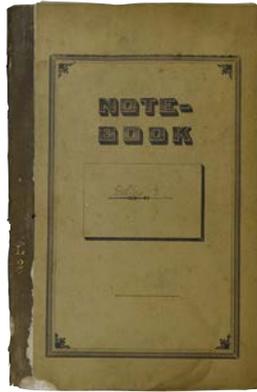
B04



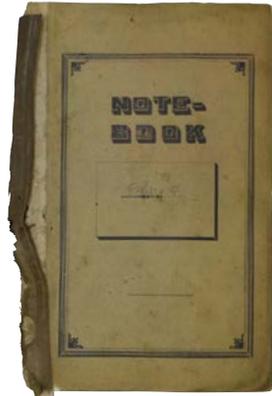
B05



B06



B07



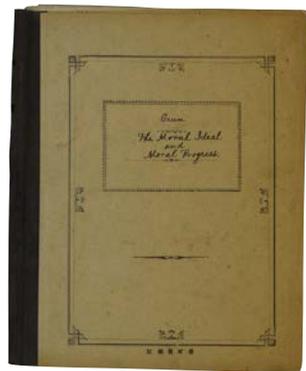
B08



C01



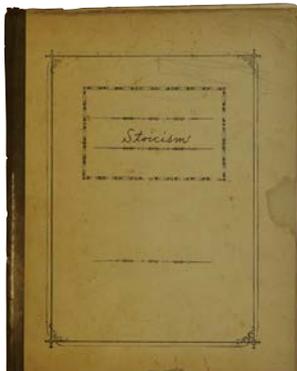
C02



C03



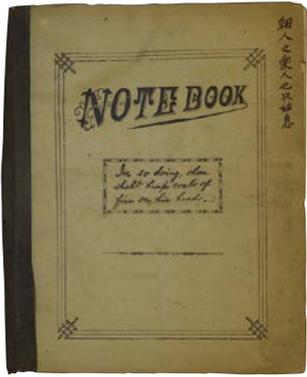
C04



C05



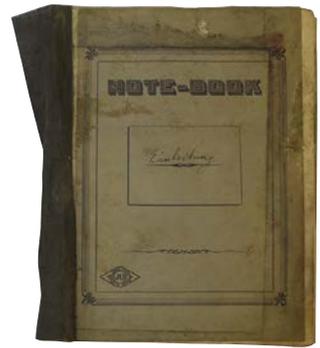
C06



C07



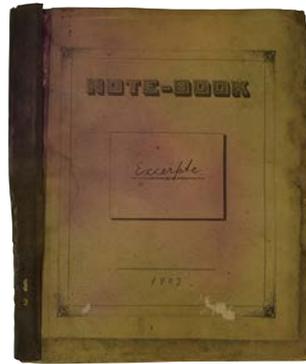
D01



D02



D03



D04



D05



D06



D07



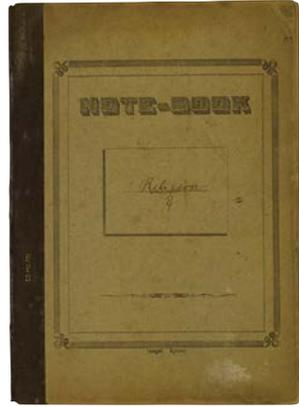
D08



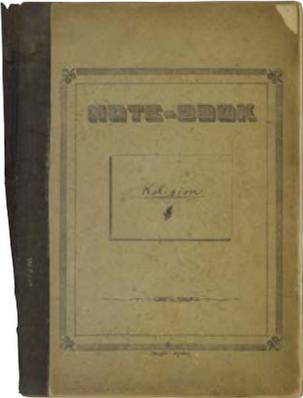
D09



E01



E02



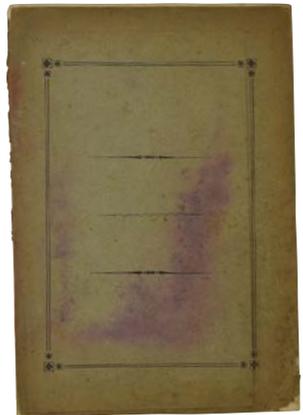
E03



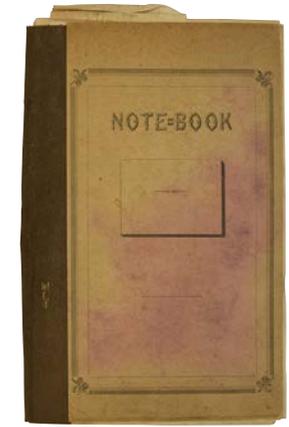
E04



G01



G02



G03



G04



G05



G06



G07



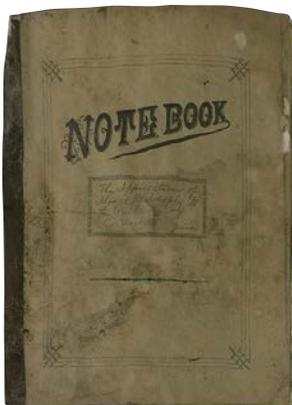
G08



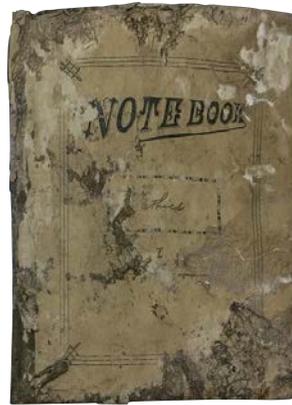
H01(クリーニング前)



H02(クリーニング前)



H03(クリーニング前)



H04(クリーニング前)

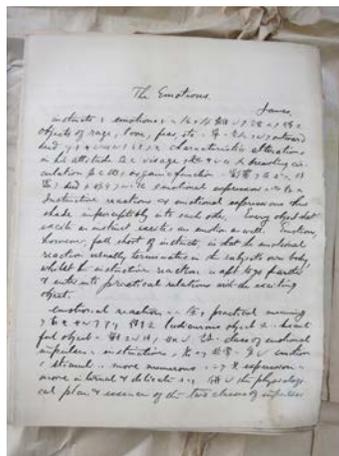
資料到着後からの保存・修復・翻刻の流れ

資料が届いた直後から哲学館は、博物館資料化と研究資料化のために対応を模索し、保存（真空凍結乾燥処理）、修復（展開、クリーニング）、翻刻（一次翻刻、二次翻刻）を行ってきた。

1. 哲学館へ資料が届く（2015年10月12日）



紙で包まれ、麻紐で縛られている



比較的乾いた資料もある



湿り気をおびている



板状になっていたノートの場合

2. 調書作成 (2015年10月30日)



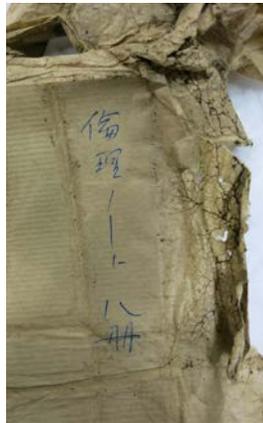
12のブロックに記号を割り当てる



ブロックの状態を撮影(横から)



ブロックの状態を撮影(下から)



包み紙も撮影

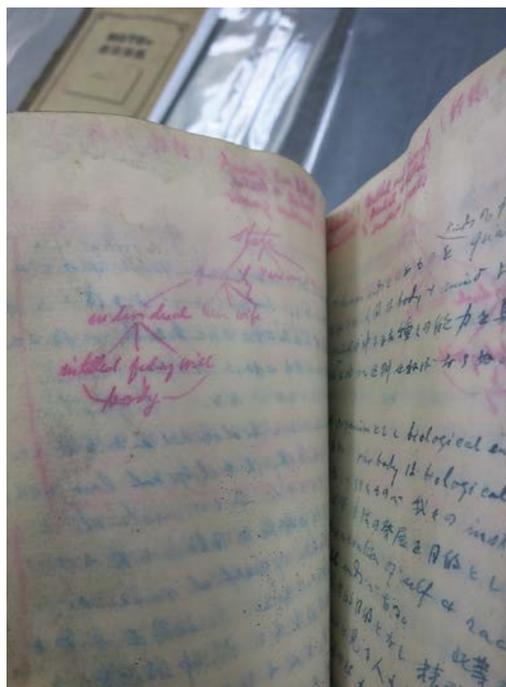


ノートも一冊ずつ撮影

真空凍結乾燥処理後 (2016年8月@奈良文化財研究所)



乾燥処理後のノート



乾燥し、ページが開く



修復方針を検討する



資料の状態を確認する

展開・クリーニング調査及び作業 (2016年8月開始)



展開作業



展開作業



展開作業



ドライクリーニング



見学中



殺菌作業用機材(UVライトボックス)



AMANE作業の様子

翻刻作業 (2017年2月開始)

The screenshot shows the Smart-GS software interface. On the left is a file list with entries like '45: DSC_0243' through '111: DSC_0309'. The main window displays a scanned page of handwritten text. Below the scan, a transcription window is open, showing the text with various annotations. A black arrow points from the manuscript to the transcription area.

Transcription text (with annotations):

かうしてかかる作用は幾万年絶つてもかかる作用は
 でてこない。氏はかかるself\$\$\$\$\$\$\$\$ free \$\$\$\$\$\$
 の@@をここに置く
 がwillの方面にもあるものとし@@@@@@@@@@一種特別
 のものと考へて居る。
 併しGreenがsensationをsimple @ nonrelatedと考
 したのが誤である。勿論これはgreenのみでは
 なく久しき以来のtraditionであ@ 併し今日の
 心理学は之を否定するので@@@@\$SS\$のrelations
 もfleeting @ moment\$\$\$ experie@@@ある。自分の考で
 はすべてexperiencesはcontinuityである。sensation
 などいふのはそのstable partsである。(Effingham)。
 @@@@@@とかrelating activityとかいふ@とはanalysis
 に由@て出来てくるのである。Experiencesは自ら
 gegensatzとその統\$に由つてできて居る。然らされ
 はいかに単純なるexperiencesも成立することがで
 きぬ。此のfieldの外にself cons activity
 がいると@@@@\$SS\$はconceptのhypotatizeしたもの
 sensation of experiences
 にすぎぬ。 James曰く are their own others then,
 \$\$\$\$ \$\$\$\$\$\$ externally. Inwardly they are one
 \$\$\$\$ \$\$\$ parts of they pass conts
 \$\$\$\$ \$\$\$\$ neighbors so that events separate by
 @@@@@@ of time in a man's life hang together unbrokenly
 @@@@@@ their the \$\$\$ter mediary events. Their names \$
 \$\$\$\$\$ \$\$\$\$\$ into separate conceptual entities.



①
 一次翻刻 (smart-GS
 作業画面): 一次翻刻は
 最初の段階のテキスト
 データ化作業。写真
 は試験的实施時の
 ため、翻刻の記号が
 未定で、難読箇所は@、
 \$で示されている。

からしてかゝる作用は幾万年経つてもかかる作用はでない。氏はかかるselfconsciousness & free activity〔自己意識と自由行為〕の基礎をここに置く

がwill〔意志〕の方面にもあるものとしてperson〔人格〕《〔挿入箇所〕》を一種特別のものと考えて居る。

併しGreenがsensation〔感覚〕をsimple & nonrelated〔単一的で互いに無関係〕と考へたのが誤である。勿論これはGreenのみではなく久しき以来のtradition〔伝統〕である。併し今日の心理学は之を否定するのである。種々のrelations〔諸関係〕もfleeting & momentary experience〔つかの間で短命な経験〕である。自分の考へはすべてexperiences〔経験〕はcontinuity〔連続〕である。Sensation〔感覚〕などいふのはそのstable parts〔安定した部分〕である。(Ebbinghaus[エビングハウス]《人名》、Sensation〔感覚〕とかrelating activity〔関係付ける活動〕とかいふことはanalysis〔分析〕に由つて出来てくるのである。Experiences〔諸経験〕は自らGegensatz〔対立〕とその統一に由つてできて居る。然らざればいかに単純なるexperiences〔諸経験〕も成立することができぬ。此のmanifold〔多様〕の外にself conscious activity〔自己意識的活動〕があるとすればそれはconcept〔概念〕のhypostatize〔実体化〕したものを

Sensational experiences
にすぎぬ。James曰く are their 'own others,' then, both internally & externally. Inwardly they are one with their parts, & outwardly they pass continuously into their next neighbors, so that events separated by years of time in a man's life hang together unbrokenly by [their] the intermediary events. Their names, to be sure, cut them into separate conceptual entities.
《James, A Pluralistic Universe, 1909, p. 285. 原典と照合済み。》

〔だから感覚的な経験は、内的にも外的にもそれら「自身の他者」である《「である」に傍点》。内的には、それらはその部分と一体であり、外的にはその隣のメンバーの中に、連続的に流れ込む。そこで、人の人生において、何年もの月日によってへだてられている事件も、その中間の事件によってはなれがたかくむすびつけられているのである。それらの事件の名前は、たしかに、それらをばらばらな概念的な本体としてきりはなしている。『ジェームズ著作集6多元的宇宙』教文社、昭和36年、217頁吉田夏彦訳〕



Sensations〔諸感覚〕からしてかゝる作用は幾万年経つてもかかる作用はでない。氏はかかる selfconsciousness & free activity〔自己意識と自由行為〕が will〔意志〕の方面にもあるものとして person〔人格〕(の基礎をここに置く)を一種特別のものと考えて居る。

併し Green が sensation〔感覚〕を simple & nonrelated〔単一的で互いに無関係〕と考へたのが誤である。勿論これは Green のみではなく久しき以来の tradition〔伝統〕である。併し今日の心理学は之を否定するのである。種々の relations〔諸関係〕も fleeting & momentary experience〔つかの間で短命な経験〕である。自分の考へはすべて experiences〔経験〕は continuity〔連続〕である。Sensation〔感覚〕などいふのはその stable parts〔安定した部分〕である。(Ebbinghaus [エビングハウス (Hermann Ebbinghaus, 1850-1909)])。Sensation〔感覚〕とか relating activity〔関係付ける活動〕とかいふことは analysis〔分析〕に由つて出来てくるのである。Experiences〔諸経験〕は自ら Gegensatz〔対立〕とその統一に由つてできて居る。然らざればいかに単純なる experiences〔諸経験〕も成立することができぬ。此の manifold〔多様〕の外に self conscious activity〔自己意識的活動〕があるとすればそれは concept〔概念〕の hypostatize〔実体化〕したものにすぎぬ。James〔ジェームズ (William James, 1842-1910)〕曰く Sensational experiences are their 'own others,' then, both internally & externally. Inwardly they are one with their parts, & outwardly they pass continuously into their next neighbors, so that events separated by years of time in a man's life hang together unbrokenly by [their] the intermediary events. Their names, to be sure, cut them into separate conceptual entities.〔だから感覚的な経験は、内的にも外的にもそれら「自身の他者」である。内的には、それらはその部分と一体であり、外的にはその隣のメンバーの中に、連続的に流れ込む。そこで、人の人生において、何年もの月日によってへだてられている事件も、その中間の事件によってはなれがたかくむすびつけられているのである。それらの事件の名前は、たしかに、それらをばらばらな概念的な本体としてきりはなしている〕¹。

¹ W. ジェームズ、『多元的宇宙 (A Pluralistic Universe)』(1909年)、285頁。訳文は吉田夏彦訳(『ジェームズ著作集6多元的宇宙』教文社、1961年、217頁)による。

②
二次翻刻:専門的な観点から翻刻の精度を高めるための作業。引用文の調査などから難読箇所を判読し、省略の補い、訳語を付けている。

③
校訂・編集作業中:挿入文や段落を整え、著者、著書名に注釈をつける。

西田幾多郎未公開ノート類研究資料化 報告 1 (2017)

2018年3月30日 発行

編集 浅見 洋・中嶋 優太・山名田 沙智子

発行 石川県西田幾多郎記念哲学館

〒929-1126 石川県かほく^{うちひすみ}市内日角井1番地

TEL : 076-283-6600 FAX : 076-283-6600

E-mail : nishida-museum@city.kahoku.lg.jp

HP : <http://www.nishidatetsugakukan.org/>

出版 前田印刷株式会社出版部

ISBN978-4-944014-12-5 C3010